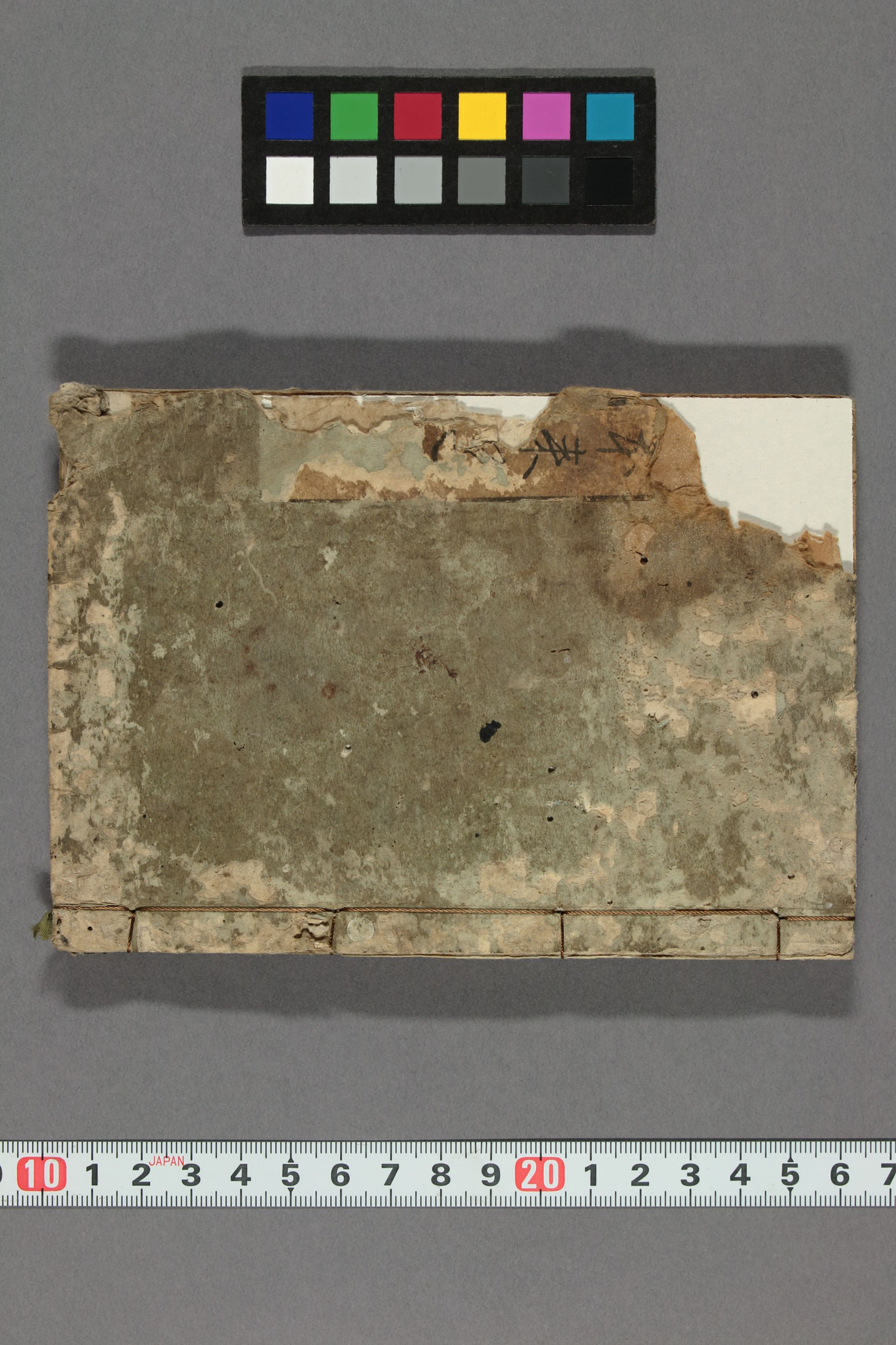

俳諧本来道序

天地初まりあたらしくめでたく俳諧和歌
とはまたとなく連歌とはまたとなく後俳諧は
はるかにせんよ俳諧といへるは何のそや俳諧等結
是ありトカ千イハ、猶のカアリく嵐の
千ウくいつまでも平結ひあらさらん其平結の
相ひて正しきを和歌とし和歌の法を
くつろ移侵らを連歌とし其の連歌本に
ゆ自おとおりしらひあるを中古の俳諧

雲英

てゝつけく世乃人のよりて拾ひてゝ
芭蕉翁出く其俳諧を正し西行向上
乃一路より西上人の俳諧を写し万代不易乃
流行を起し給ひぬ我友知己居かゝ医士い
諧乃百家姓書より俳諧し乃西風乃歌
藤あり上一日書式情を示しして示に題しして
ゆ来しとゝいく実ふと芭蕉乃道の形
俗示踏うまゝを逃てゝ来しゝ乃名教
へ道すんとゝまる上日まも方俳乃蒙牛盲人

序八一

乃枝とゝいへゝ西風を出ゝとゝ乃図士此集
と産右ふ亜く其西風頌を通せ事使ゝ
すやゝ

肖明和宣乃とゝ俳生

越府

吉槃下

為角

雲翔下長寿

序二

俳諧本来道

正風艶乃辨

北越富城加與述

俳諧ノ道たるや其名い史記ふりとはるて滑稽ノ祖ノ諧とゝ我邦ゆくい天暦比叡さ八雲清抄小弘を初ち古今集ゆさゆうい歌を歌ー奥義抄ゆゝ乃稚乃名月紙出ー其外定家卿ノ紙宗祇乃音義等さゆゝ海いおれと皆是和歌道乃末ゆゝ俳諧乃大綱

波宗祇の猪隆弘紹守武ら法系の子孫新
もろいと名付ふるもの其氏の集ふ多しといへども
唯之連歌乃狂言ふして歌ハ和歌の席乃餘
吾あれい俳諧の指潤証定めを世ふ法則定
式と云ふ事ハ蕉翁の著述ふ法則定
真徳の印章ふ座ふ印を連歌乃ふ
あるへい意安乃新式と謂ひと者を新ふ例
ふ蕉翁の行遠あるふ一歩ふ墨乃ふ
あまふふる祖乃師ふ事ふ吟も堪ふの一ふを

伝へて宗鑑守武貞徳宗因乃法ふ
乃指紋略しふ用るのふ
ふ出ふ一ふを羅き俳諧ハ人者と先世と倣
聊ふあひふハ偏ふ古人者と云ふ非ふ徒多ふ
中ふ宗鑑あふ宗因あり白岩の忠知者
あふ義ひふふふ只ハ変化流行ふ
而ふおふふハ古人ふ拘るふ紀則者と也ふ
ハ蕉翁の不易流行ハ全く詩乃起清物人ふ
らひふ時句ハ只ふふと法ふ所ふふと

しとて遠く潔くさらすの行ふ事ありしかの
さまを義一時武昌川に居住せしより二十下
筆ふるくさまを紙さて其角山風雲を云来許六
う軍とおもして新に新の流ふこと拓うさる
ふ事をうるとして三の余人の名稼乃か著
て数へうる紀門業皆を風流を作さて学ひて
といふ若色をも世義乃道を西風狩と称と
ふるものや俳諧乃法のをふあら次侍ふも新に
も西風あるを周侍三百篇より漢魏晋梁陳

隋の唐に法格韵律定まりて詩に質乃俗述ふのを
唐に初りて沈全期杜審言ふ後格律と定め
遊玄弁とのふ盛唐に及ひて俊傑多き中
杜子美李太白王維高適等あ作ふ西風の
詩大成を其に風流文質彬ふ又ハ初唐ハ
八雲乃和歌を神として神代乃系歌を
文よりを人皇代に成りて崇神の系歌を
ふ人とふ事とを宣ふ事乃法代まて八歌のさ為さ
ふ事ふ流の形ふ変ふ俳ふ延喜の頃ふ法

代ふるに要を忠実にして実乃法則を正
しくし正風雅をとなえ出し人々これ詩盛唐
和歌は延喜の清代俳諧は蕉翁を以正風とせり蓋
其正風といふこと事は万代不易乃法則にして格調
乃かなしらべ詞乃美麗小蕉翁一流の俳道を起
し詩歌連俳乃四家と称せらるる事となるべき
は能正風不易の道ふけつるを以也志ゑを其流行乃示
今古乃かなしらべあるを踏襲する義行脚紀小曰今
八首師匠と示す事ふるあるべきこれは昔の俳

諧は歌と雖ども言葉の花とそなれ
ばやはり思ひ入るべき俳諧なれば古今三十首の中小
冬かりそめ乃詠めをりれば中垣ゆるして花は咲ける
おもしろの人乃心のうるとしかはるべし
おもしろの品減小淡うるはなるべし
俳諧乃花月をとらへ
鶯今ふるかしあるうるめるうるや
頼朝乃はなやかなる月をそこうるを
志とけき軽口のみ出るべく月も雪と雪ひあるべく閑

あるものなりと世に伝へ宗匠あまた出さり
拾小夫も紅葉しかりをとこ
春さ行雁
行乃すゑやとかあれなる沖乃石
と、をとこ、ありてあつらへをする中あるをと世に賞歎
し人も侍ひしかを乃ゑかとかとひし遊の
あつる節傳教大師は三藏三善提と相ひあひし
丈夫にひとしかを色法は実相の観とかし人間
乃業のあつ侍しかは色を修行をとひ出つる事

あらん遠ゝ云ひつるをしかるとも古人乃説とあむ
ゝ事あるをとをとをとを云ひ初ゆる事歌のことを
さるをや義乃こをとするや西行乃和歌かおゝ宗祇
の連歌かおゝ雪舟乃絵かおゝ利休が茶ゝ
おゝ事要道をゝ物ゝ也をゝも別特よおゝ
ゝの造作を踏ひゝ四時を友とをとをるをかあゝ
をとゝ行事をくおゝ一所月かかすとゝ事かし
像如かあゝゝ時ゝ美秋かひとゝくゝ世かなゝ
ゝ時ゝ歌かかゝ歌と美秋を出ゝ歌とをとゝ

造化に随ひ造化にかへれとあるを宗とし以其旨推
乃心の不易にして誹道に対する旨あるべし
今世に蕉風の俳道盛にして蕉門の大道とは
知ずして人其称也さまざまに其流行のさまをとりて
小西風の調を謡のごとく諧調は時行に調の上
調は我邦武門の雅楽にして是を以ひ乃雑談
乃果も東海や清白川乃末々も及ばざる所上
人も中古も今も其調はかはらずして人乃心を動
し鬼神の感をもしめ更を厚くし雅其を動

の情をなぐさめて又当世乃俳諧と称するもののさまこれは悉
く正風を失ひて卑下野鄙に落入りて奇を好み
作を求むし或は謎乃ごとく気しく変化をかりの
くるしみを乃をよしと覚えて純然誹諧負に耽り其
楽と書はる彩絵よ是なくころくるは家乃俳諧り
底を今くまれ川とせ川とも由ふる又作者も何を達
と彼一大の虚をもちまて万代乃実をとまず先生より
を或は凉菟乃独をとよろこび或は凡飄乃理屈に
落支考乃辞に達ひくもし三傑は誠に蕉

門の作楷めて正風をたすけ後大小変化
し給ふ小一家の建立をもつ小例をもつ事をもつ以
先を縁て蕉門直授あまたをえく蕉翁乃
遺書をもつ人さく称しくめて己う師をのこし
とをえて後代世三ヶ乃風流をもつしふあまりて
り身を以て永住の吳服と称を誓まつ遊
ゑの道乃嘉をもつや朝のをを族大弘めとし
ふ弘河をも倒をもつ弘求め巣ヶ多を詩んと
を以も正風乃名弘いまんはやんあひはめ蕉つ

と唱ふうつ其風調をもつく代流乃作也をもつしに
を蕉つの調を表をもつ人あまを切支丹耶蘇乃と
くをもつ時きをもつ格くを乃猿説を出して衆人乃
聽弘奪りんをもつや誠ヶ風俗中の人ふあるつ
とをもつくをもつ代乃易の流行ハ天地自
然の理ヶて知ハ年ノ咲てを新しく月ハ青
しあくを古うをもつ人ハ日ノあるく其言の楽
ハかをもつねを其時ノしあるを変万化
しく然も奇をのくハ作ハあるねを作ハあるを

[illegible]年あらそふこと[illegible]蒼蒼晋[illegible]角
[illegible]一軸小窪[illegible]乃[illegible]小[illegible]
狂言放埒乃[illegible]やけさを取のけ面白さ味[illegible]
[illegible]曲節を[illegible]
[illegible]南山を[illegible]の粉[illegible]を風俗と[illegible]閑和小
拗[illegible]を拗るの閑情を[illegible]と[illegible]形の外の風
情を集め[illegible]小動くの露[illegible]を謝[illegible]露を[illegible]
[illegible]露を[illegible]巻山[illegible]接く猛獣を接
乾坤小逍遥[illegible]雲水小流行を[illegible]

深[illegible]柳小緑[illegible]紅乃古味[illegible]
[illegible]五[illegible]
[illegible]山窪を[illegible]
[illegible]人拙[illegible]
[illegible]拙り洒落[illegible]
人[illegible]西[illegible]人の山形[illegible]
[illegible]古人の評をきく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]七郎の書[illegible]

後藤蕉翁の事を編集し、さく製作
て初て其ゝ味の独言深き中にて其の風
雅を知るに構へく後人の流行乃ち其ゝ
本末のまことく神駿拔擢なるに驚絶して
大澤山陽ゝ田吏乃敬仰なり

蕉翁七部書乃辯

蕉翁七部書ハ所謂　冬の日　春の日　曠野
孤　猿蓑　深川　歳暮　俳諧　先師

上八

於て是蕉翁の名ほけそく気運を生ずるに
後猿蓑発刊乃の数多くあるに拘はらず
蕉翁後小撰出せる小撰選と定かゝ今後
小風調を海されに主乃業自中新敬拔抜あ
つゝく流行少し津かりせるに似たれと曙雅
乃時小もゝや岩倉徳の撰ゝを高度影まさり
先冬乃日の出ハ詩を以く海されて漢魏晋梁
陳隋の古詩排律のゝ〻菊古函言ふて
主の拔古ゝ〻書の日乃出ハ小〻あて

和唐の氣格乃ことゝ行狀ふをし瞭解魏の大
厳行の狀みて滑稽大振よ調へつゝ蕉叢源川
ふ知るべく却笑滑稽大成しゝ詠よ系代不
易の流行西風の真髄とゆゝ岩倉信の著へ
百句百変化みゝく句し敦狙狀自出狀あれ
見その狀とゆゝ世業過ぎて看るべきれる信
諧平話乃法よ過て風流を及ぼするべあらし
されい猿蓑ハ俳諧九端九古今集ハ俳とて紀書
とゆ手ふ脱略しゝく後岩倉信續猿蓑第六見

乃ゝ見句出狀あれハ俳諧ふ歴を入中さゝ生あり
早竟蕉義三百余狀も俳仏行の一方ふ出る事歴
牛渡馬動石鄭本敏感も蕉蕉事るも甚ふ蕉
事と一味乃ことふ系とあれるハひゝ蕉義の句ハ行
ふあるゝも蕉逝ふ事ふて全名醫の病ふ意し
ゝ方と流とふ似ゝり其中行の狀をゝとゆゝる
事い嬉遊ひゝこ猿蓑深川の蕉ゝしい盛四唐の
詩のとゝ俳道とゝの人俳句仏特事を指てゆ
事の祖を取るべ蓋詩ふ嬉入乃場あるゝ俳諧よ

者又悟入の地あるを禅と詩と俳と悟入の境界
其悟入や空ふあるを向上酒為漫拙酒源を
とゝめんに日下野俗ふ至て俗波平流を正
しおりくもこゝ有りくも幽玄地ふ自性を切ん
蕉門の大道人と云へしゝるや西行書なるに師
とすへき師匠を師とすへきの八道書ふあるを学ふとも
くゝ為を知らんとを成先名を乃見を熟考をし次ふ
まを此日蟾蜍飄搖蕉風深川翁の道を熟考を
又山陰信濃さらこの名の道を飄搖ふ熟考を

しゝ又しゝ抜て其後源義乃由の道しゝ義ふ
を乗ふ好士の集をとゝくく初て牡西を不俗俗乃用
蟾蜍として悟入をゝ年あらん義ふのとく熟
考をし終ても俗俗牡西乃ゝ西貝をゝ本あ
をゝ云ゝ年風図蕉をゝん八蕉狐和道其ん識を
時乃をとゝ乃へしゝ初のゝ乃ふ蕉古義再世ゝく海
乃等くゝとゝ山妖俗を何とゝ先ゝ悟ゝ世乃
俗乃ふ抜ゝる人名ゝ俗ゝ似ゝく西風の俗意を知
らゝを俗風乃抜さふのゝ抜ゝる道をゝも風俗

とゝのゑんや假令い其ハ釈迦のごとく 弥陀のごとく乾
乙因ハ日蓮と親鸞乃ごとゝ高小拙本乃釈迦を拝
て日蓮と親鸞とをむかとゝ孔子の教を聞きて
宗儒を信ずるごとゝ禅を学くゆゑの所ハ嚴
上座のごとく云ふ者乃法い声聞僧と異のを
嘆ず呼正道い入難く邪路い去易き悔ゆべしを歎
遠ざる人乃多きや嗚呼

復古礼辯

内ゆゑ正風乃古小復る事やて伝ゆゑ其人
多く冬乃日夏乃日の光をあゝけ曉埜瓢の酒蕩
と呼び猪養川乃清流を汲岸侍の百変化を楽
ずる人多くて其義の下劣を常ととゝ知ず我
近ごろあるゆゑも今御代化風乃梨一あるごと
亜洲小新天しゝるを陳小古雅を唱ふの多ごとく
解乃俗調ナ小七八ゆゑて高くゆゑ時の紅ゆゑ流正
風神をさして其風と称し抑ゆゑ嘆ずを識ずごと
さゝんとて其句ごと分自ごとゝ小一句ごと正風の雅言

とそ古風と申すもむかしの高風なり今時
流風とおもひこそ又分別の古風とおもひてしかも
風も古風も古人の心を形容する句の姿なりとて新古
乃名いあれと徒に識の分をもわきまへの人の句を紫
と注する共野古乃言葉分はむかし呂世乃言葉に属く今の
人稀なりて爲も正風乃古雅なる句を作るの号にて俳諧の
もろこしを論ずるに和歌を正風とて俗ひりてこれを神の
乃出現なるのそと古人の世ひやうそひとうるさこさは
さるもとに古人の嗜ハ句こそ言ぬ神の霊ひくこさ

とそこそ盛る宮殿もあるとこそゆ古人の句ハりと
より三行の和歌と義人ハ只さうしとなくハ日本稀なり
まこと其こんを拾ハ一もうの中風とて他愚俗ものく
義乃時ハ俳諧云句者のとうく時師乃句ハ小里巴人乃曲也
仰ある和歌あるそとうまこハ只言葉乃異なる異下段なり
しうく利歌小脈ろうろ記うさとうをうより
教句附句乃法も自然と勝しく為く直乃向上を
詠ろ事うこ只正風を志て乃実ま黄蘗乃心得を
教るうちとくせよ七八家の法より唐詩選と日夜唐詩

と欲ひ[illegible]ふ者西湖晴起[illegible]射神く詩法を学ぶ人
まづ其胸自然と塵寰の網より移りて句々清雅
なるべきこと学の乃ち其人に出七部を熟読し
神て其人乃十指と共に一堂の把臂[illegible]を門下乃
第一義とせと

西風爽句乃辯

古来出市の其人を学ひ[illegible]ひ杜子美と四行上人
乃二者なりとさまで杜子美ハ清新の人なる体と

[illegible]豪傑[illegible]く思ふ若て蓋深く悲弦慷慨の切
る角く人をして[illegible]上ふ涙をそそ[illegible]む然[illegible]ふ如く
[illegible]く去水終深し形船恰受[illegible]を縦侵堤柳
漫樓浪花と[illegible]生俗月漏とかくる類古今詩聖
[illegible]ふ者第ふ杜傑五言を抜とす又西行上人ハ
和歌の様ふ[illegible]くして乃[illegible]求[illegible]ふ[illegible]
[illegible]て自然の妙を[illegible]く洒落白上の歌仙也
りさるや
[illegible]人ふ花[illegible]人ふとあ[illegible]

此影ハ全俳諧なるんにひさき白雲乃躰にけれひそくつれと
ろ山の姿能涼しかるべきことに西行一代乃揮稿ともいれ
其翁ハ雲(?)も云葉をかくさして多く俳諧なれハ富
士乃歌も風に靡くれは浮されあるまし宗祇に古今集
山家集乃綱をとつきん其句こハ西行の奥義しと
いふなるべし杜子美西行此二老ハ虚実自在乃
人なれハ例のおかしく例のさびしく或時ハ悲涙を樽
笑或時ハ机よ涙をおとしつ遂に又佛頂禅師乃室
に参禅し深く見性の眼を開き揚子一枝をより

俳諧乃崇ひを悟て十七字の錐に大活路を拓く自古
俳乃上なるとし風の吟あるまく世人風乃名とし崇むる
とそ常に居迅速に是を芭蕉とおもひて往来す
に志て是芭蕉に心ありにて見るものきく
もの哉く風雅乃桟として只風流に痩られけれ
三更月下無我入と伝揮し破屋を出るに
野ざらしを心に風のしむ身哉
と吟て身ありさまのに定ん誠に難きんかの
いう人翁に風雅の変化あまさく一格なるを示得し達室

天和の神仏のごとく貞徳宗因の間に出でし其弟子師と
をのをのを又他の乃俳諧往古中古の世乃俳者て
約まる一部ゆりうこと弘法を以て格調とする
む往古中昔金山風神をさみてあるを格式
定まりまて十ふ七八種に合ふをかるを

往古

八雲こと詠歌　さて文てしこはねてく業ふり
山桜ふちしふやふ入てめてり

茂雄と追うけてく引あるしふ　定家
五月雨ふよりてそきてまを夫法のもの　信綱
さをとりやをあてまをあをさあ乃場　光広

中古以来

八橋ふく　かきや麻時るうをを皮をを乃場　宗祇
橋乃書ふ　和海風く麻ぬ和ふか　宗長
移りくを乃ふ乃ふ　ふ生面を　基佐
業ふりを家を欲を乃楊細　兼載
飛雲やうふ　ふ乃の滝　守武

天神さゝ橋上にて

紅葉ちる黄やさなうつかる錦　宗鑑

雪消帰り幕の花のあるうるる　仙吟

何事ぞ〜氣配代帝夏はく　素仙

茶をちらすかれと茶屋のうく　釈沢房

よりやれ麦かすくとも雨　玄的

皆人乃意麻のそれや秋の月　玄旨

花ひと川被て〜ちるうるる　真徳

雲島乃秋や哉のたくのうる　立圃

　　維舟

明日ゝ日の百合乃内れるゝ乃春　西武

世乃ゝさの耳ゝ寄けし初ゝ花　李吟

秋月ふのつゝ山宿ゝ乃ふ　安野

末乃世と行ゝ乃ゝ春乃ゝ　貞恕

源とて花ふゝ行ゝ前の岩　宗因

おつゝ乃ゝ宮ゝ鶴や園れ弁　定一

いさのゝ乃ゝ浦ゝ孫乃新吟八春　貞室

行の三ゝ乃ゝ乃ゝ土ゝ乃ゝ草ゝ　忠知

右八古素武八春の時代乃調ゝて正風乃ゝ

けんらきさま有あうう甚紙表の格律定まらざる
八雲小西風を好てかゝるが如き一時の流行
ありて俳諧古人奇といはざるべしや

又蕉翁の三絶　延宝天和の作

離魂人形天皇の清宮ちとよ
梅桜さくそ芳ちの品うの女うの郎
常ちの城ちの職ちう嬌柳
萩さくらや一枝小倉山乃犬

むらさきの秋又殿さくれ撲　敢
甚分義句数多あれとまくしの山鶯や古寺梅筆
さ西風城建之せさる筆のまれ拘ちうを

又　貞享九作

古池や蛙飛こむ水乃音
牡丹風乃分八升　秋小仙さくく
蛙さくしをんよ風の志ひ分うの
秋十と世却て江戸城さを吉
霧とくし試よ浦世すくらを

年月を経てそを離れさるを
喜ぶるあやをあるを山の名所あり
芋掘大きとろろ掘の形
右貞享の作嘉永のきれと言ふ正風の不易流
行なる紙詠して同志と共ふ

又

蓮葉ふ伊勢の国や伊勢の国
傘ふ出しまけんを柳ふ
四つ立笠の掘る知れんふ

面白くして形て恋しき形無ふ
形家よりくく姉し凡の泥
名月ふ掘下の男や田北昌
洗足ふ絵ふ園乃けしめうふ
杉苔や志ゝ本の塚の色ゝ
鍛冶屋ふ小形を言ふや大根
ゝゝ安家や形糠乃明白北端

右元禄の作蕉翁きれと正風の不易流行
ゝゝや全元禄北湖ふ志ゝ本の色ゝ八ゝ貞

高山宗砌と云ふ人大成をとりて蕉門
桜川の周士今古雅信の法式正しく後勢
ゆたに美麗風小粋中あり

冬乃日

世尊の尾張の国に下て貞享元甲子年
壁水蕉門の徒と共に撰をなす
又新仙や其角の俳諧を以云
へ古詩排諧のごとく

分立八長蓬の雨に降ひ成の夜八沿くの嵐に明あらら
俗尾張なる俗人素さん高山素さん著狂歌の中
士武蔵に下る道中を尾張国熱田に付る 蕉翁

牡丹風の力八弁 富小俳諧

さくらやとけて立の山茶花 北水
有明の月水に酒屋仮ちをく 花の弓
かしら乃雪をまとらの赤 馬 重五
新鮮のかそこ落の白ひあき 杜國
日乃ちるしく 正平

わか庵は鷺に宿かすあたりにて　野水

髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉

いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五

消ぬ卒都婆にすごすごとなく　荷兮

影法のあかつき寒く火を焼て　芭蕉

あるじは貧にたえし虚家　杜国

田中なる小万が柳落るころ　荷兮

霧に舟引人はちんばか　野水

たそかれを横にながむる月細し　杜國

隣さかしき町に下り居る　重五

二の尼に近衛の花のさかりきく　野水

蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉

のり物に簾透顔おぼろなる　重五

今ぞ恨の矢をはなつ声　荷兮

盗人の記念の松の吹おれて　芭蕉

しばし宗祇の名を付し水　杜國

笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮

冬枯わけてひとり唐苣　野水

きらんと碎くに人乃骨ゝあゝ　杜國

烏賊い素乃圓れくしかく　重五

おもんされ迷中と為しむとき次　肖水

秋ゝ一弁ゝ中ゝとゝて秋て　芭蕉

日東乃雲白ゝ坊ゝ月をゝて　重五

巾ゝ木槿とゝ花ゝ開ゝ手　荷兮

ゝ乃ゝ花ゝ命ゝ尋ゝのゝ人ゝ　芭蕉

年ゝ暮ゝ乃ゝ鳥乃ゝ鳴ゝ　杜國

素ゝ新ゝ明方乃星ゝ出ゝ　荷兮

上　九月

きゝふゝ抹乃南西ゝのゝ小中ゝ　肖水

後ゝ人ゝ別ゝ湯ゝ陽ゝ変ゝの花ゝ漂て　杜國

席下ゝ花ゝ枝ゝ付ゝ人ゝ　重五

十五乃日

はゝ雲ゝい越ゝ人ゝの擦ゝ地ゝ名ゝの日ゝ小ゝ徒ゝ岩ゝ　肖水

祢ゝ少ゝ雲ゝて行ゝ小ゝ貞ゝ享ゝ三ゝ丙ゝ寅ゝ年

乃擦ゝ地　荷兮

ゝ雲ゝ人ゝ人ゝ乃ゝ伊ゝ勢ゝ　荷兮

桜ゝ咲ゝ中ゝ馬ゝ乗ゝ　重五

山ゝ寺ゝ日一時ゝ小ゝ籠ゝ遠ゝ　雨桐

澄かうの火ふあうの　李風
隠風ふうしきけん　昌圭
景うまよ仲乃宮　執筆
須ゝ生寺よ汗の帳る紙うへむ　重五
おのゝ源留　荷兮
文主乃林ふ　李風
雨れ寄て角のさゝ草　雨桐
れ寄こゝ度ハ骨ふ　荷兮
低城乳ふかく　昌圭

旁ふ人鏡て人の新稲　雨桐
ゝとのゝ神事　重五
名吾ま道夏乃砂　昌圭
毒て長男の武　李風
抑ふ汐そ宮　重五
入ゝ日ふ稼　荷兮
ふうと麦　李風
新物ふう　雨桐
馬繋ふ　荷兮

心とゝかしたゝき立位乃藏主　昌圭

吉野東宮司の門ふかきて　雨桐

けゝの跡あるゝ人はけゝ　重五

紅葉を賞をかゝ霜ふるまゝ　昌圭

念佛ゝこゝろふかく秋おもゝ也　李風

穂蓼生ふ荒を信者ふ僧の也　重五

秋名残松名ゝ呼ぶ月　荷兮

傘はゝ月ゝ雨はゝ雨　李風

紅葉　はゝ出家がゝし　雨桐

時ゝ西行ゝ雨ふゝ年よりまゝ　荷兮

物語ゝ月を二人してゝ　昌圭

世ゝ多ゝ高ゝ海ゝ年とゝて　雨桐

孔雀ゝ哭ゝ蝶ゝ峠の芭蕉　重五

幾年を経て弁とふゝ　昌圭

筆もゝ見ゝるゝとゝ　李風

曠野

元禄二巳の年荷兮撰ふ

芭の序あり行の抜ふ入まゝ

越人

降うるも都よりけかるひとや
須磨のあまの塩焼月　芭蕉
蔦むら毎に雨ぬる秋の夕暮　越人
雲はまるれる秋の夕暮　仝
孤篠乃大こゝろ五ゝろ也　越人
風ゝ吹まて帰る市人　芭蕉
何事も長安ハ見る利の地　仝
鬱乃ゝ多さこゝろ月とるかれ　越人
ひそうゝと師走のそらよこ出て　芭蕉

ゑとゝと世話やく寺乃鐘とゝ　越人
山里小ゝきこゝ霜乃名を降こ　芭蕉
見捨ちつをわ雨れあけ江乃　越人
きゝくゝや俗を聞くあてやふ　芭蕉
風ひゝきしゝふかのこゝ降こ　越人
ゝも降つとこの浪花もさこゝ　芭蕉
物ひそゝきむ舟路ゝりゝ　越人
月と共ゝ所のこゝ船を出也　芭蕉
雲雀こゝ降ゝ此船ゝさ　越人

破垣戸乃釘打直す事乃末　越人
ふるをいさしき麦乃ひさかを　芭蕉
あるくて服部乃はもむ十寸流　越人
ものおもひわろき乃の乃の芒　芭蕉
人さてゆくしく清水乃匂ひる　越人
初雁よ蕎麦乃岩乃片渇　芭蕉
むとゝあと嵐乃ちゝく嶺乃小　越人
墻穂乃さゝけ一霧を出ぬきて　芭蕉
あやあくゝ蛙うゝ夕乃ゝ　越人

ゝ乃ゝゝハきゝのゝこゝ清くゝ　芭蕉
秋月ゝゝゝ月ゝゝ空ゝ清ゝゝに　越人
砧も遠く鶏ゝゝゝゝゝゝゝ　芭蕉
秋乃田乃かゝゝゝゝゝゝゝ　越人
さゝくゝゝゝゝゝ文字同小ゝ　芭蕉
ゝゝゝゝゝゝ色庭乃ゝゝ屋　越人
ゝゝゝゝゝゝゝゝ乃痩てゝゝ　芭蕉
ゝ乃ゝゝ清ゝ義ゝゝゝ宮　越人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　芭蕉

此度ハ須の速水て越人の庵を
元禄三庚午の年の年乃撰也ゝ
の侍をはらとらふ屋

若鯉　翁

赤乃南小汁を以ても楽うゝ
西日乃とうふ元文三年ゝ　珍碩
旅人乃鬢かゝ雪とゝて　曲水
佩も男ハ女さ乃　翁
月待く假の民家の灯　孫碩

数白はゝ洗ふ乃ちやまさ　曲水
鞍馬三寸ハ秋の雨て　翁
名ハさゝ乃しゝ涼かゝる雨　孫碩
入迄小袖訪乃漏湯の夕間暮　曲水
中山と背の高ゝ山臥　翁
乃ゝ手を唯一方ゝ落ゝ重　孫碩
おとゝ小鮒よりも密多降く　曲水
物思ゝ乃小ゝの咎ゝとゝて　翁
月見乃ゝ影の独おも来ゝ雲　孫碩

秋風の無なきを原浪の吉　曲水
雁行うるや月の美松　翁
千部讀義乃盡の一分田　孫碩
巡礼乃ち道のかけろふ　曲水
行ふ　も様乃四をあれ吉　翁
文書往のちうう　孫碩
羅了日紙厳て清ち　曲水
熊野乃月のあひを　翁
年末ふ紀の巻守の頑ふ　孫碩

酒くゝ一乃まを一方吉一方吉ふ　曲水
雙六乃月を翁を　翁
假乃指ふむ　孫碩
中りふ土間よ巻ふ蛍迄　曲水
新名ふ里乃あの里の吉　翁
時まくふ乃躍乃形蛍　珍碩
月花くふ明ふ月　曲水
去蔭餘を招ふ書指て　翁
唯四方苗風そ居乃露　孫碩

一貫乃勝出つゝと五十丸と　曲水

医者のこゝろハ能く分別　翁

茶碗をあらうとの田　曲水

鶯ハ　さゝ子ゝ毒の山中　孫碩

猿蓑

此集ハ元禄三庚午年ゆゝく孤集

と同年発兆去十余年の遺ゆゝく

全行の御所影ゝ花実芳情素侍也

ゝ流の代不易乃流行俳諧の古

今集とゆゝく　凡兆

市中ハ物乃あはれしやこの月

あゆしゝと門ゝしめ戸　芭蕉

二番茶を取て也果を積ゆゝく　去来

庭ゝゝまゝくゝゝ　一枚　凡兆

此節ハ雑七ゝん物ゝゝて不自由　芭蕉

ゝゝゝゝゝゝゝゝ長ゝゝ　去来

茶の村ゝ　蛙ハゝゝる夕ゝ　凡兆

藤乃花ゝゝ小行ゝゝ　芭蕉

道ゝ乃おゝゝ花の散ゝ　去来

能登の七尾乃名ハ行うき　凡兆
田乃穂に出うきうきの花を見て　芭蕉
行く人入しの小清門乃霜　去来
立ものを庵の風ハ倒さぬ女郎花　凡兆
陽炎や弁の舞ふ袖一さ　芭蕉
茜ノ雷ハ実ハ吹落タ嵐　去来
俤や立くさ寺ハ鳴ふるの　凡兆
猶川乃猶と世ハ秋の月　芭蕉
年ハ小一年の根ふるさうるも　去来

立ものは蛙ハ流ふるか　凡兆
見ぬ袋ハ山ふとを乃ふ　芭蕉
追ふて昇ふ馬の刃指　去来
て川ちう蓮ハ水ハ清ふ　凡兆
戸障子ハ遠かふしの雲屋敷　芭蕉
てんしゆ内ハ月ハ色ハ　去来
おろしと其雑を作る月　凡兆
蛩と物ふ小起ふ秋　芭蕉
真作ふ古ふ作ふ弁蔵　去来

四うらて芳西のあるを半　梶　凡兆

芋虎よ暫居そへ寸砂ゆを　芭蕉

いのち拭しき撰集の海法　去来

さりしふ品かりをさうを意　凡兆

浮世の果を皆小所ゆを　芭蕉

何有小粥さうと涙ゝを　去来

清爽とるれいこ信ふ板安　凡兆

ゑ此ひ小風乃遠ゝうふのけ　芭蕉

かををゑうこのわゝをゝ　去来

上三十後

高日寺俳諧新